

ゴールドスミス の 思想と方法

— *The Deserted Village* を中心に —

山 本 和 平

目 次

- は じ め に
- 1 対立する価値——思惟のパタン
- 2 事実（農業革命）とその表現（詩）
- 3 *Luxury*——ブルジョアの価値
- 4 都市と農村
- 5 *Sweet Auburn*——貴族的価値
- 6 方法(1)——対比
- 7 方法(2)——一般化と個別化
- む す び

は じ め に

本論の主題はゴールドスミスの詩『荒れはてた村』の中にあらわれた彼の思想（人間観、社会観）及びこの詩を成立せしめる詩的方法の検討である。

この意味での思想と方法との間には（それぞれ独立して非連続ではあるが）ある連続性が存在すること——すなわち思想は方法を通して展開され、また方法は思想を反映するといった相関関係の存在を予想している。

この詩は、彼の思想をかなり明白に語っており、ある意味では思想の宣明を目的としているといつてよい。したがって方法はいかに思想を適確に伝達するかの一手段であるとみられる。その意味で両者の相関関係はかなり切り離し難いもので、一応検討の順序としては第一に思想を、第二に方法をとすることにするが、思想の検討の過程で方法のそれに及ぶこともある。

『荒れはてた村』に対する僕の関心は、それが十八世紀後半から十九世紀初めにかけてイギリスの農村に発展した農業革命を主題にしている——少なくともその記録的側面をもつ——という文学史的常識から出発した。一般に産業革命の与えた深刻な人間的社会的影響は種々の角度からさまざまな時代に論じられているが、産業革命の前段階でありその一部でもあった農業革命の最盛期に一文学者がそれにいかに反応したかは、そこに文明の資本主義化にたいする文学者の思想が必然的に反映せざるを得ない故に、いわば彼の思想の試金石として

大きな興味がある。

第二の関心は、いわゆるロマン主義再興運動以後の詩を「詩」の常識として
いる僕らには極めて異質とおもわれる感じ——ある種のよそよそしさ、散文か
らうけるのと似た平明な感じ——が一体どこからどうして来るのかという、こ
の「感じ」の由来を詩に即して検討してみたいということであった。

この大層漠然とした二つの興味が、それぞれ思想と方法ということになった
わけであるから、ゴールドスミス の思想と方法といっても、その総体を問題に
するわけではなく、僕の興味の焦点にあわせてこれを検討してみるにすぎない
い。

1 対立する価値——思惟のバタン

Ill fares the land, to hastening ills a prey,
Where wealth accumulates, and men decay. (ll. 51-52)

(富が蓄積され人間が衰退していく土地
そこは禍いの地、急速に不幸の餌食となる)

この詩は1770年5月に出版され同年八月までに5版を重ねたという。五詩脚
カプレット 430行よりなる長詩である。かつて幼少年時代をそこで過ごし、そ
こから「憂き世の放浪」の旅に出ていま帰りついて、故郷 Auburn の変りはて
た姿を見た帰郷者の感慨を基調とする *elegy* である。その中核をなす思想は
引用の二行に明快に述べられているといえる。この思想は主人公の放浪の体験
のなかで (‘In all my wanderings round this world of care,/ In all my
grief……’ ll. 83-84) 認識されたものである。この体験が簡潔な二行のうちに
結晶した。その体験の重みの裏づけがここにはある。

こうした鋭い現実認識、洞察と予見²⁾は、次の簡勁な一行 (この詩全体でい
ちばんショッキングな) によって繰り返される——

The country blooms —— a garden and a grave. (l. 302)

(いなかには花咲りだ——庭園と墓場の)

この皮肉な逆説的な、頭韻をふむ両語の並置を見よ。彼にとって理想の (今
は失われた過去の) 「田園」は栄えない。今はなき「田園」のあとに構築され
た富裕階級 (‘wealth’) の庭園 (‘luxury’ の象徴)、そして「田園」のなきが

1) 同じ興味から出発して、その小説『ウエイクフィールドの牧師』を *Critica*, No.5
で論じた。

また、ここでいう「方法」は「文体」の意味をふくむこともある。

2) T. S. Eliot はこの二行を引用して、‘……the idea is one which, while as
acceptable as Johnson’s, is more original and also prophetic.’ と絶讃してい
る。‘Johnson as Critic and Poet’ (1944) in *On Poetry and Poets*, p.181

ら、廃墟のみが栄えるのである。二つの対立——country を占拠した都市富裕階級と country を追い出された貧困な農民階級との対立。否定さるべきものが現実に栄え、讃うべきものが死滅する——この現在と過去、二つの現実が、
'and' によって強引に結合され、'and' を挟んで対立しおつかりあうといったおもむきである。

また結尾部でもこの思想は要約反復される。sweet Poetry にたいして詩人は次のように呼びかける——

Teach erring man to spurn the rage of gain;
Teach him, that states of native strength possess,
Tho' very poor, may still be blest;
That trade's proud empire hastes to swift decay,
As ocean sweeps laboured mole away;
While self-dependent power can time defy,
As rocks resist the billows and the sky. (ll. 424-430)

(誤れる人に教えよ、利得に狂奔するおろかさを。

教えよ、生得の力を持つ国は、

貧しくともなお幸福なことを。

おごれる商業帝国は急速に衰退するのは

大洋が人工の防波堤を押しながすのとおなじ。

自恃の強国が時に抗するのは

岩が大波や空に抗うのとおなじ、と。)

ここに甚だ情勢論的な思想が判然と主張されている。彼の思想の、文明論の要旨がここにあるのだ。一般に 'native' (土に根ざした) ものの力強さと 'laboured' (人工の) ものとを対比させて、国家的な規模において、文明史的現情勢をこのような形で明示したのである。

ゴールドスミス思想(思惟方法)の根底には、ここからただちに推測するように、実に簡明な対立観念がある。二つの対立する価値を並列して一方を肯定し他方を否定するという思惟方法——これが思想の骨格をなしており、この方法は、終始一貫、対立物を並置し、それを反復するという形で進む詩の構成法にまで及んでいる。

その対立の各項は「理想」と「現実」という素朴なものであることはごらんの通りである。第一の引用の wealth と men (wealth は広く否定すべきブルジョア的価値、men はいわば Men と大文字で書かるべき、ありうべき人間) であり、第二の引用の garden と grave (garden は「田園」を追放したブルジョア的なもの、grave はありうべきものの現実における姿) であり、第三の引用の states of native strength possess と trade's proud empire

(前者はありうべき国の姿、後者は否定すべきブルジョア的国家)がそれである。

対立の各項、「現実」と「理想」が、そのまま、ブルジョア的なものと反ブルジョア(あるいは前ブルジョア)的なものであることはいうまでもあるまい。彼のばあい、反ブルジョアとは前ブルジョアを直ちに意味しているところに彼の思想の保守性を認めることができる。しかし保守性がそのまま否定的価値とイコールではない。彼の当面していた現実の本質を曝露するのに、保守性に当然内在する反時代性、すなわち文明史的現情勢の批判、が有効に作用したことは疑いない。

彼が身にしみて目下体験しつつあったところの情況は、たんにこの詩を通して語られているような経済史的、道徳的カテゴリーに属する問題ではなく、彼が明確には意識していなかったかもしれないような「人間」そのものの運命にかかわる情況だったはずである。すなわち人間がその「共同体の本質」をまさに喪失しつつある危機だったのだ。

ともあれ、彼の思想における「ブルジョア的なもの」、及びその対立物としての理想的なものとはなにか、を検討してみよう。それにはまず、このはなはだ情勢論的な詩を書かせた情勢そのもの、当時農村において進行しつつあった農業革命、エンクロージャーという社会的事実を眺め、それを詩人がどう受けとったかを検討してみよう。エンクロージャという客観的歴史的事実にたいする詩人の主体的構えを通じてはじめて、彼の「思想」が鮮明にあらわれるからである。

2 事実(農業革命)とその表現(詩)

Where then, ah! where, shall poverty reside,
To scape the pressure of contiguous pride?
If to some common's fenceless limits strayed
He drives his flock to pick the scanty blade,
Those fenceless fields the sons of wealth divide,
And even the bare-worn common is denied. (ll. 303-308)

(それではどこに、あゝ おごれる隣人の圧迫を
さけて、貧民の住むべきところはどこに?
共有地の柵のないあたりへさまよい行き
子供らを駆ってまばらな草を摘ませれば、
この柵のない畠を金持は分割し
草とぼしき共有地をも去れという。)

『荒れはてた村』とはエンクロージャーによって貧しい農民が離村し

depopulate された村のことである。こうした社会現象は十八世紀後半から十九世紀初頭にかけてイギリスの主として東中部諸州全域に見られた現象である。これは農業技術や農業構造、さらに農村人口の階級構成を変容させ、産業革命を可能ならしめた一大変革であった。

新しい農業技術及び構造はエンクロージャーを必然にした。上に引用した詩の一節の中で詩人が目撃し、抗議している当面の対象もこのエンクロージャーという事実であることは明瞭である。

イングランドの東部、南部諸州ではやくからエンクロージャーが進んでいたのに反し、東中部諸州では農業生産物の市場化が陸運の適切な手段を欠いていたため、遅れていた。しかし運河が開け、ヨークシャ、ランカシャ周辺地域の工業化が進展するとともに、新しい市場ができ、それにもなつてエンクロージャーが進んだ。

農業技術の進歩は、オランダの進歩した技術の導入、羊、牛の飼育、農業用具の鉄製化としてあらわれた。これら諸改革に共通に認められることはかなりの資本の使用によってはじめて遂行されるものだったということは注目に価する。このことは、依然全国の約半分の土地で行われていた、原始的なopen-field system や小規模なヨーマンの農耕方式と矛盾した。すなわち、新方式のパイオニアはまず裕福でなければならぬ。大土地所有の地主でなければならなかった。

そんなわけで、この農業技術上の革命は、イングランドの農村社会の全構造を変革する社会革命に進展し、またそれと相並んで発展した。

第一次農業革命といわれるチューダー期のエンクロージャーは農地を羊の放牧地に転ずるためであったが、第二次のそれは、新しい科学的な多角的農場経営を有利に遂行するために、それまで共同耕作されていた open-field を一様な大農場に転化するためのエンクロージャーであった。エンクロージャーは農地のみか更に進んで、共有地や荒地にたいしてもおこなわれたし、また小作農は地代のつりあげにより、小自作農は新方式にたつ大資本と競合しえず、それぞれ農地を手放したあとはエンクローズされていって、そこに一様な大農場での資本主義的経営が進んでいった。

このようにして土地は投資の対象となり、占有及び所有の両方の形式で土地は富裕階級の手集中され、一方土地を失った貧民は、その村か又は工業都市かで賃銀労働者の地位になりさがる結果となった。

以上が『荒れはてた村』の背景をなす歴史的社会的事実の大概である³⁾。

3) 以上の叙述は A. L. Morton : *A People's History of England* (London : Lawrence & Wishart, 1951), CH. XI, 1 及び G. M. Trevelyan: *Illustrated English Social History* (London: Green and Co., 1951) Vol. III, CH. 3 による。

これは後世の史家が歴史的視野のなかで、主として経済構造の変動の面から十八世紀後半の農村における社会現象を記述したものである。この詩の中でゴールドスミスによって糾弾されている事実が、歴史家の記述した事実と矛盾するとしても、ただその事実誤認を指摘するだけでは問題の充分な解決にはならない。いくつかの事実誤認がありながらも問題の本質は確実に押えておるばかりである。

彼は問題の本筋は適確に見抜いていた。彼がこの問題から抽出しましたそこに反対せしめた思想はエリオットのいうごとく 当代の詩人たちに比して「独創的、予言的」であった。しかも事実誤認もそれほど甚しいものではない。本章冒頭に引用した一節でもあきらかなように、彼の叙述する事実は、エンクロージャ下の貧しい農民の境遇の適切な描写であるといえる。

最も大きな事実誤認は、エンクロージャで主要な、直接的な役割を演じた、地主及び大農場主を無視して、それを都市ブルジョアに帰している点、そしてエンクロージャーの結果出現したものとして大規模化した農場ではなく、ブルジョアの garden のみを見ている点であろう。

しかし先の歴史家の叙述にあるごとく、土地は資本投下の対象となり、資本主義的農場経営が行われてきたからには、かつての地主ももはや共同体社会の長老ではなくなりすでに都市ブルジョアとその本質において変りはなくなつたとすれば、彼の洞察の鋭さこそ賞揚すべきではないかと、という弁護論さえ充分になりたちそうである。

しかしどうやら、批判の対象から地主をはずし、もっぱら都市ブルジョアを悪玉に祭りあげたのは、ゴールドスミスの保守的思想にありとするのが妥当とおもわれる。つまり思想が事実誤認ないし歪曲の媒介をしたわけで、そのため彼が正当にも注目した社会現象の経済的意義を、この詩が充分には担いえないことになったのである。

詩一篇を文学作品として論ずるのに、（しかもより事実的な小説とはことなる詩を論ずるのに）事実論議は無意味であるとは一応はいえるが、この詩の思想を問題にするばあいには、上述のごとく不可欠な操作であるし、又現に「エンサイクロペジャ・ブリタニカ」の筆者⁴⁾は「ゴールドスミス」の項で『荒れはてた村』を終始、事実か事実でないかの点に集中して論じ、これをフィクションと断定して能事おわれりとしている事実があるからである。

以下「ブリタニカ」の寄稿者マコーリの説を略述し、次にこれと反対の説をかかげて私見を述べることにする。

マコーリは、この詩の細部の美 (the beauty of the details) は賞揚するが、詩全体に滲透しているゆるすべからざる誤謬 (one unpardonable fault

4) Cf. T.H. Macaulay, 'Oliver Goldsmith', *Encyclopaedia Britannica* (14th ed.)

which pervades the whole) にはショックを感じるといふ。彼のいう‘fault’は、しかし wealth や luxury についての theory の fault ではない、詩人の reasoning は正しくなくてもゆるされる。ゆるすことができないのは、「描写のまずさ、自分の住む世界の観察が軽率なため、その肖像が原物と似ていないこと、事実存在しなかったし存在しえようはずのないものを結合してでっちあげた怪物をこれは実人生の模写であるとして示すこと」であるときめつけ、この詩は「矛盾した部分から構成されている。幸福な時代の村は、真のイングランドの村である。衰退した村は、アイルランドの村である。ゴールドスミスが結びつけた幸福と悲惨は、二つの別々の国、二つの別々の社会進歩の段階に属するものである」といふ。そして彼がえがいているような、移住していく一家の悲痛な姿をイングランドでは見たはずはない、荒れはてた村は彼の生れ故郷のアイルランドの窮乏した村の記憶にすぎない、とこの詩の虚偽性を衝いている。

大層厄介な問題を実に素朴にもちだしたのだとおもう。アリストテレスにならって、事実にはたいする「歴史家」と「詩人」の態度の相違をここで云々し、前者はすでに起ったことを語り、詩人は、蓋然性、必然性の法則にしたがって起りうることを語るといふ一般論でゴールドスミスに助け舟を出してみてもはじまるまい。この詩が事実的誤謬を含むことはすでに見てきたところであり、又詩に事実の厳密性を一次的に要求することのおろかさもすでに常識である。

さらにこうしたマコーリの所説への反駁がある。以下ケネス・マッククリーン⁵⁾にしたがってその反論のいくつかを列挙すると、Paul Mantoux (*The Industrial Revolution in the 18th Century*, 1935, p.181) でこの詩を引用して、信頼しうる時代の描写といい、R.S.Crane (*New Essays by Oliver Goldsmith*, 1927) で「いささか異端のにおいはするが……〔『荒れはてた村』の〕直接的社会的背景はイングランドに求めねばならない」と主張し、

W.E.Lecky (*History of England in the 18th Century*, 1878-90) もこの詩を引用しており、又この詩が出版された1770年の *Gentleman's Magazine* (XL) も、盛んなりし時代の村の描き方は、リアリスチックではないが、荒れはてた村の描写にあたっては想像力に頼るには及ばなかった、といっているそうである。

つまり イングランドには繁栄する村を、アイルランドには荒れはてた村を割りあてたマコーリの方こそ、事実の面で誤謬を冒しているというわけである。

またハンフリーズも、「ゴールドスミスの荒廃した楽園の夢は理想化である

5) Kenneth MacLean : *Agrarian Age: A Background for Wordsworth* (New Haven : Yale Univ. Press, 1950), pp.30-32

ことはたしかだが、その描写は、エンクローズされた中部諸州の多くの地方に妥当するだろう」⁶⁾といっている。

さて、事実問題に拘泥するのはこれくらいにして、客観的事実を取捨選択し、あるいは歪曲する媒介となる思想の検討にうつらねばならない。

3 Luxury——ブルジョアの価値

O luxury! thou curst by Heaven's decree,
How ill exchanged are things like these for thee!
How do thy potions, with insidious joy,
Diffuse their pleasure only to destroy! (ll. 385-8)

(おゝ贅沢よ！ 汝、神に呪われたものよ！
汝のためにこれらの美しきものを捨てるのはいかに不利な取引であることか！
お前の薬物は陰險な喜びをもってその快楽をまきちらし
破滅させてしまうことか！)

さきに、ゴールドスミス思想は反ブルジョア、前ブルジョア的であるといった。彼がエンクロージャの社会的現象のなかに見出した意味もこの思想を媒介してであることはいうまでもない。むろんただそれは政治的イデオロギーのみではなく、文学的感性的な要因とも結びついている。たとえば、彼がブルジョア性の象徴的特質とみている luxury も、それが、伝統的な文学観——「田園詩」によって養われた感性——を打ち砕く（客観的な農村社会ばかりではなく、彼の感性的秩序をも）がゆえに、luxury に反対なのである。

では彼がこの詩のなかで述べている非ブルジョアの価値、理想的価値——理想的であるゆえに脆くも崩壊した価値——とはなにか。それは至るところに撒き散らされ反復され強調されているが、たとえばこの詩の冒頭の一節がそうである。健康と豊かさ、季節の恵みと美しさ、つつましい幸福、祭の日の rural sports に象徴される共同体的性格、無邪気さ……。又結尾ちかくで去りゆく rural virtues としてあげているものは、労働に満足していること、親切なもてなし、やさしい夫婦愛、信仰心のあつさ、変らざる忠誠心、貞節な愛 (ll. 403-6) などである。

これら諸価値をエンクロージャ以前の農村に帰し、エンクロージャを推進したブルジョア的なものとこれを絶対相容れざる敵対的価値とみなしている。ブルジョアの価値の担い手として最大の敵とみなしているのは「商業」であ

6) A.R. Humphreys : *The Augustan World* (London : Methuen & Co., 1954)
II, ii 'Change in the Country', p. 53

る。それは trade, wealth, tyrant そして luxury など、さまざまな呼称をもってよばれるが対象は同一である⁷⁾。

ブルジョア的なものといっても、ゴールドスミスの意識では工業家ではなく商人である。それも当然で工業家が歴史の舞台の前面に躍りてしたのは産業革命を通してであり、彼が都市のなかで実際に見たのは商人であった。

政治的な次元でいえば、農村を基盤とした貴族的な地主階級を代表する Tories にたいして都市商人階級の代表たる Whigs が、ブルジョア的なものであり、道徳的思想的な面では、田園の無垢と質朴に対立する都市的な個人主義と贅沢とがブルジョア的なものである。そして当時の政治情勢におけるブルジョアの支配力の増強と地主階級の没落とはそのまゝ、思想的道徳的面でのブルジョア的個人主義倫理の支配と農村的（ほとんど貴族的の同義語とみてよい）倫理の衰退であった。したがってゴールドスミスが攻撃したのは、政治、思想、道徳のすべての面におけるブルジョアの価値の一切であり、luxury として彼の糾弾しているものはその象徴的価値なのである。

Whigs の政治的経済的実践の基礎にありそれを推進した思想は Mandeville の *Fable of the Bees* (1714) に表明された哲学であるといわれる。それによると、社会は、「蜂の巣」にたとえられるが、「虚栄、利己主義、腐敗、贅沢、偽善、詐欺、不正等、考えられるかぎりの悪徳が自由に行われるかぎりその社会は偉大であり繁栄する⁸⁾」といった大層楽天的な個人主義思想である。（この本の副題は「個人の悪徳は社会の得」*'Private Vices, Publick Benefits'* である）。人間社会という「巣」の中での私利私慾の追及が産業活動の促進となって社会的善をつくりだす。その意味で利己的な消費も贅沢な生活も逆説的に善であるという。

しかし悪は善を生むはずはなく、一層の悪をつくりだすと、少くとも詩人の眼にはそう映じた。ブルジョアの経済発展にともなうこれら悪徳（ブルジョアジーにとっては少くとも必要悪）のひとつ luxury がゴールドスミスにとって悪と意識された主たる理由はそれがイングランドの支柱たる「大胆な農民階級」とその諸徳を破壊するからであった⁹⁾。（傍白——むろんゴールドスミスと

7) たとえば—— 'Wealth accumulates, and men decay.' (I: 51), 'Amidst thy bowers the tyrant's hand is seen.' (I.37),
'...trade's unfeeling train Usurp the land...(II. 63-4),
'...trade's proud empire hastes to swift decay...(I. 427).

8) Basil Willey による紹介. *The Eighteenth Century Background* (London : Chatto & Windus, 1953), ch. VI, 1

9) Cf. II.53-56 : 'Princes and lords may flourish, or may fade :
A breath can make them, as a breath has made :
But a bold peasantry, their country's pride,
When once destroyed, can never be supplied'.

共にこうした個人主義の否定面を認めながらも、これをただ悪とばかりきめつけるのは正しくないと僕は思う。個人主義が、共同体の人間関係の下においては決して開発されることのない人間精神の創造的エネルギーを開発し発展させていくというその積極的価値を見落してはならない。さもないと手放しの「共同体」讚美に転落するだけだろう。)

彼の贅沢反対はマックリーン¹⁰⁾によれば、ひとつは1732年にマンデヴィルを批判したビショップ・パークリやフランシス・ハッチソンの伝統、ゴールドスミスの生国たる貧しいアイルランドの伝統を汲むものだそうだが、スウィフトを嚆矢とするポウプ、ジョンソンなどのトーリー派文人共通のキリスト教的モラリストのセンチメントと見ることもできる¹¹⁾。

「贅沢」といっても狭い意味では大金持が村を買いとりそこに個人の庭園や猟場その他を作ることであるが、より重要な意味では、イングランドの農村経済の根底を揺るがす商業及び工業(工業の方はあまり攻撃の対象となっていないが)を意味する。彼は、安定した国家はその経済的基礎を農業におくべしという、トーリー共通の重農主義の信奉者であることは、第二章で引用したこの詩末尾の「商業帝国は忽ち衰退する」それに反して‘native strength’ (土地に根ざした力)をもつ国家は恵まれている、という所からも明確に結論できる。

(傍白——現代の僕らにとって、こうした「国家」の帰趨を問題にする傾向、こうした公的な立場からの発言の傾向——荒れはてた村への哀惜は一私人として故郷の喪失を悼むのではないことは後述する——は、かえりみてほとんど異常とおもわれるのではないか。「ロマン主義再興」以来僕らはあまりにいわゆる「自我」に毒されすぎていて、「自我」などと口にするのは照れ臭くてしかたがないほどではないか。「近代」と共に「自我」が、あたかも天から降ったか地から蛆虫のごとく湧いたかの如く云々するのは笑止千万といわねばならぬ。「自我」は人間の自己意識の発生と共に古い。意識が外界を客体として認識すると共に「自我」は発生したのだ。「主体性」といおうと「自我」といおうと、外界と自己意識との矛盾統一の場そのものののだ。)

さて本題にもどる。彼の「贅沢」観には一見矛盾がある。

「贅沢」反対は決してそのままルソー的自然への復帰ではない。いやそれどころか、そういう「自然」を「オーガスタン・エイジ」の作家らしく嫌悪していたといってよい。一切の人工を経ない「自然」のアメリカ大陸を、離村し移住する農民たちの苦悩の土地として描いているところ (ll. 337-358) を見れば直ちに了解される。

10) MacLean, *op. cit.* p. 31

11) Cf. Earl Minor, 'The Making of *The Deserted Village*', (*The Huntington Library Quarterly*, vol.xxii No.2, 1954.)

本章はこの論文から有益な示唆をうけた。

本来 'luxury' とは *luxuria*=abundance 「豊富」を意味する。その意味で luxury が悪であるはずはない。窮乏は本来悪であり豊富は本来善だ。しかし luxury は、本来の積極的価値と同時に否定的価値をも含む。積極的価値が忽ち否定的なそれに転落するばあいがある。(やはり「文明」の産物である「恋愛」や「結婚」を参照せよ。)

ゴールドスミスは、『世界市民』(1762)の中で次のように述べている。

「贅沢を罵倒する哲学者たちには贅沢の利点が解らないのである。われわれのもっている大部分の知識ばかりか美德ですら贅沢のおかげであることがどうも解らないらしいのである。」

「贅沢、それはわれわれの欲望を増加させ幸福の容量を増大させる。」

「いかに反対しようと、贅沢は好奇心に刺戟を与え、もっと聡明になりたいという欲望をおこさせる。」

「それだから、いかなる見地から見ても、贅沢を擁護する理由はある。」

ここでは「贅沢」の積極的価値のみが手放して讃美されている。これと、「おゝ贅沢！ 汝、神に呪われたるものよ！」という『荒れはてた村』の絶望的な呪咀とは明らかな矛盾を示している。こうした「贅沢」の否定への転化はどこから来るのか。上記の引用の末尾には次のような、いわば但し書きが附いている。

「われわれの安全と他人の繁栄とに矛盾しない限り、できるだけ多くの人生の贅沢を享受すべきである。そうして、新しい快楽の発見者は社会で最も有用な人間のひとりである(傍点筆者)。」¹²⁾

「われわれの安全と他人の繁栄とに矛盾しない限り」という条件つきでのみ、「贅沢」はその積極的価値を維持することができる。しかしそれは自然にまかせれば度をすごすことは当然で、「荒れはてた村」を眺める詩人の眼にはそれはすでに悪魔的なもの——「神に呪われたるもの」——と映っている。ブルジョアによって追い詰められた貴族的価値の危機！

望ましい文明状態の徴表がいまや悪徳の代名詞になった(それが「人間」にたいしてふるう破滅的な暴力については、たとえば次章冒頭の引用を参照)。

このように、luxury がすでに、人間にとって否定的な価値へと転落したとき、そこに喚びだされてくるのは、luxury に汚染されていない過去の(あるいは理想化された)田園社会というイメージである。都市が悪の巣、luxury の培養基という認識はおそらく都市の成立と共に始まるが(急いでつけ加えておこう、一方農村共同体にはたとえば「村八分」という悪の発生する契機が不斷に

12) 以上の引用はすべて *Citizen of the World*, Letter xi

存在する), この「都会的なもの」の成立及び支配こそ, その対立物として「田園的なもの」の, 更には「自然」の, 定立ないし発見を, 詩人に迫ったのである。

4 都市と農村

……the poor houseless shivering female lies,
 She once, perhaps, in village plenty blest,
 Has wept at tales of innocence distress;
 Her modest looks the cottage might adorn,
 Sweet as the primrose peeps beneath the thorn :
 Now lost to all ; her friends, her virtue fled,
 Near her betrayer's door she lays her head,
 And, pinch'd with cold, and shrinking from the shower,
 With heavy heart deplores that luckless hour,
 When idly first, ambitious of the town,
 So left her wheel and robes of country brown.

(11.326-336)

(家もなくふるえおのゝいている哀れな女,
 かつては, 恵みゆたかな村にあって
 無垢なるひとの悲運の物語に泣いたこともあろう。
 いばらのかげよりのぞいている桜草のように美しく
 そのつゝましいおもざしは, 小家に花をそえたであろう。
 いまやすべての人に見すてられ, 友人も, 純潔も失われ,
 仇し男の戸口の近くに, 頭をたれ,
 寒気にせめられ, 雨におのゝき
 重い心で歎くのは, あの不幸な時,
 最初深い考えもなく都会にあこがれ,
 糸車と野良着をすてた時のことだ。)

はなやかな都会に憧れて身を滅ぼす田舎娘の描写のなかに都会と農村が敵対関係にあり, 都会性が, 農村性の中核たる美德のみか農村そのものをも破壊させてしまう事情が暗示される。「最初は深い考えもなく漠然と都会に憧れ, それから糸車と野良着を捨てた」田舎娘。彼女の憧れた贅沢は幻影でしかなく, 内実は悪魔的な裏切りをもって曝露された。彼女のかつての無垢, 羞恥, 勤勉がそこで強烈に思い返される, というわけである。(傍白——僕らの国の現代の一詩人も『東京へゆくな』と歌う, ゴールドスマスとは別の新しい次元で「東京へゆくな, ふるさとを創れ」と。『荒れはてた村』を読みながら時折僕の脳裡を

掠めたのはこの詩である。僕の好みをいわせてもらえば、過去の故郷にかえらぬ涙を流すのより、「ふるさとを創れ」という命令調のいざないの方がはるかに好きである。『谷川雁詩集』参照。)

このように農村を都会と対比させて、無垢の住み処とみる見方は、むしろゴールドスミスひとりのものではなかった。

たとえばウィリアム・クーパーは *The Task* (1785) の中で、牧歌的な黄金時代は神話でしかないことを認めながらも¹³⁾、やはり田園を無垢、淳朴の住み処として讃えている。都市の確立と農村への破壊的侵入がそうした神話を単なる空想とおもわせないだけの現実的基礎を神話に与えたといつてよい。事実彼は、「都会が田舎に染みをつけた」¹⁴⁾ といい、白無垢の衣の上の汚点という比喻を用いている。

A・R・ハンフリーズは無垢なる農村という考え方のいろいろな表現を紹介している¹⁵⁾。

ジョン・シェビアはその『イギリス国民に関する書簡』(1775)の中で、「……眼にはいるところどこにも豊かさが満ちみちている。外国の百姓たちの知らない清潔さがどこの村でも見られる。田舎はまだ汚れに染まっていないようだ('The country seems yet untainted.')

と報告している。「まだ汚れに染まっていない」というのは、田舎が美德の家、都会が悪徳のそれなることを前提とし、前者もやがて後者によって汚染される一抹の危惧を感じていることにほかならない。又同書でシェビアは村に 'good order, sobriety and honesty' を、都会に 'anarchy, drunkenness and thievery' を帰しているという。

またジェイムズ・ウォード師は「フェニックス・パーク」(1724)なる詩の中でダブリンについて「私はダブリンの軽蔑すべき悪徳と愚劣を知っている。私は田舎にあるかの天国を愛する。」¹⁶⁾と歌っている。

もう挙げるまでもないが 그레이 は 'the madding crowd's ignoble strife' の都会と、そこから遠くはなれた村の貧しいけれど静かな生活とを対比している。

こうした例に見られるような都会と農村との対比、前者の汚濁と後者の無垢という定義は、商業都市の繁栄と工業都市の発展のなかで、多かれ少なかれ都会の暗部を覗き、都市生活の非人間性を経験したものにとっては、ごくすなお

13) たとえば 'Would I had fallen upon those happier days.

That poets cerebrate: those golden times.....

Vain wish! those were never. (BK IV, ll. 513-525)

14) *Ibid*, BK IV, l. 553, 'The town has tinged the country.'

15) A. R. Humphreys, *op. cit.*, p. 30

16) 'I learn her Vice and Follies to despise

And love that Heav'n which in the Country lies.'

に受け入れられたに違いない。そこに理想化された「田園」が成立する。

都会生活に疲れたものが田舎の自然風物にひかれるといった単純な憧れ——先に引用した都会に憧れる女の裏返し——から、哲学的瞑想の場としての田園まで、田舎は都会の生活者の一種の理想境として絶対化されていくのは自然の傾向であったといえよう。

都会的汚濁の欠除という現実と絡みあいながら、その上にたち、それと交互作用をおこないながら「田園」の純粹無垢という観念をつくりあげたのは、クーパーの例からも推測しうるように一部は、伝統的な「田園詩」によって養われた詩人の感性である。

過去のオーバンの情景は田園詩的情景である。都会との接触をもたぬ孤立した——このことはゴールドスミス の理想社会が成立するための必須条件である¹⁷⁾——農村共同体的社会——この上に「田園詩」が展開する——とはどんな社会か。

A time there was, ere England's griefs began,
When every rood of ground maintained its man;
For him light labour spread her wholesome store,
Just gave what life required, but gave no more:
His best companions, innocence and health;
And his best riches, ignorance of wealth.

(11. 57-62)

(イングランドに苦難が見まう以前には
一ルードの土地で人間一人が食っていった時代があった。
軽い労働で充分健康的な食料がとれ、
生活に必要なものは与えられた。しかし、それ以上はなかった。
彼の良き友は、無垢と健康。
彼の財産は、富を知らぬことだった。)

エンクロージャー以前（「イングランドの苦悩のはじまる前」）に果して経済的事実としてこうであったかは疑問である。（しかし 61-62 行については前述のシェビアのいうとおりこの社会の美德であっただろう。）

農民の生活が農村経済そのものの原始性（限られた資源、富、市場化、不安定な天候……）に決定づけられている以上、農村共同体の現実^{ゾラ}は不可避免的にある程度の貧困と苦悩とを含むものであり、農民は田園詩人らの（パトロン面をしいいい気な）理想化を嘲笑していたにちがいないのである。

17) たとえば、'Remote from the polite, they still retained the primæval simplicity of manners……', *The Vicar of Wakefield*, ch.IV;
'Remote from towns he ran his godly race.', *The Deserted Village*, l. 143.

しかしいづれにせよ、エンクロージャー（農業への資本主義の侵入）による前近代的農村共同体の崩壊の危機が、詩人をしてそれを理想化せしめ、人間の美徳を田園に、悪徳を都会に分属、対立せしめたのである。

5 Sweet Auburn——貴族的価値

この詩はパストラル・エレジーといわれる。ではエレジーの対象はなにか、彼の愛惜おくあたわざるもの、その喪失を哀悼されているのはなにか。むろんオーバンそのもの、オーバンの含む一切である。すなわちその社会形態、倫理、そして彼の幼少年時代の故郷である。

ところで、ここに「貴族的価値」と呼んだものは、3章の「ブルジョア的価値」に対するもので、「貴族的なもの」の中には、保守的、農村経済的、共同体的等、「ブルジョア的なもの」でない反ブルジョア的、前ブルジョア的な一切を内包する概念として用いる。既に言及したようにゴールドスマスは、ただ私的な平面でものを考えたり行動したりせず、「国家」全体のあるべき姿を構想するという公的な、貴族的な面を強くもっていた。その際農村共同体が「国家」の基本的細胞、ないしは原型と考えられたのである。これはあながち彼のみでなくいわゆる重農主義に共通の考え方であるが、それがこのような経済的社会的形態としてのみでなく、同時に望ましい人間関係のあり方、エトスでもあったのである。

共同体としての国家は保守主義者たるゴールドスマスのいわば固定観念であった。彼にとってブルジョア的な国家観、私的利益の増大のための機構としての国家は、正しい人間関係を破壊するものとして——「自然のきずな」¹⁸⁾をたちきるものとしてしりぞけられる。

だからゴールドスマスが「村」といい「田舎」といい「田園」というとき、それが意味しているのは、ワーズワース的な「自然」ではなく——そういう「自然」はこの時点ではまだ発見されない——むしろ「社会」であることに注意しなければならない。（より正確には「自然」を環境として生活をいとなむ「社会」といった方がいいだろう。ここでは、「自然」と「社会」とが未分化のまま「田園」のなかに統一されている。そして、おそらくこの両者に分解するのは十九世紀のリアリスト達——既成の諸観念をなげすめて、自然事象のなかに己れの無垢の心をさらす自然詩人と、ソフィスチケートされた人間社会のなかの真実を曇りのない眼で発見しようとするいわゆるリアリズム小説家——であるというのが、僕のパースペクティブである。）

18) 'nature's ties', *The Traveller*, l. 349. この点に関しては後述する。

小説『ウエイクフィールドの牧師』は、失われゆく共同体社会へのノスタルジックな理想化であったが¹⁹⁾、この詩も又その本質においてはおなじである。

彼が国家的な見地から、農村共同体の衰退を悲しんでいることはすでに引用した一節（脚註9）にも明瞭だし、又次の一節では、国家はひとつの有機体に比較されつつその運命が予見されている。

Kingdoms by thee [i.e. luxury], to sickly greatness grown,
Boast of a florid vigour not their own.
At every draught more large and large they grow,
A bloated mass of rank unwieldy woe :
Till sapped their strength, and every part unsound,
Down, down they sink, and spread a ruin round.

(ll. 389-394)

（王国は、贅沢のために病的に肥大し、
不自然な、見かけばかりの活力を誇る。
一服ごとに肥満して
仕末にこまる巨体へとふくれあがる。
あげくのはては精力は吸いとられ、各部分が病気にかゝり
次第に傾いてどさっと崩れる。）

「国家」が luxury を吸飲しつづけて病的に肥大し遂にはその活力が消耗して各部分が不健全になりやがて滅亡するという、国家をひとつの有機体^{オーガニズム}にみたてる（むしろ、国家を ^{フィクション} 機構、^{メカニズム} 機械 とみるブルジョア的な国家観と対比している）のは決してゴールドスミスの独創ではなく、一般の政治学書が教えてくれるように、保守主義的な国家観に共通のものである。有機体^{オーガニズム}は各部分がその機能を果たすことによって維持発展されるわけであるから、これはそのまま国家を共同体とみなすアナロジーに通じている。

個人主義的、自由主義的恣意の支配するブルジョア社会のもつ悪は、長詩 *The Traveller*『遊子』（1764）のなかでは詳細に論じてある。彼は、イギリス国民の「自由」を認めながらも、それが度をすぎすときの危険を指摘する――

..... independence Britons prize too high
Keeps man from man, and breaks the social tie;
The self-dependent lordlings stand alone,
All claims that bind and sweeten life unknown.
Here, by the bonds of nature feebly held,

19) これについては拙稿「ゴールドスミスの思想と方法 ―『ウエイクフィールドの牧師』について―」（*Critica* 5号）を参照されたい。

Minds combat minds, repelling and repelled;
 Ferments arise, imprison'd factions roar,
 Represt ambition struggles round her shore,
 Till, over-wrought, the general system feels
 Its motions stop, or phrenzy fire the wheels.

(*The Traveller*, ll. 339-348)

(イギリス人の高く評価する独立心は
 ひとづきをわるくし、社会的なきずなを断つ。
 お高くとまって人は一国一城の主となる。
 ひとを結び生活をたのしくするのぞみも知らぬ。
 イギリスでは、自然のきづなゆるく、
 心と心が相たゝかい、互に反撥しあう
 動乱が発生し、追いつめられた分子はがなりたて
 おさえつけられた野心は、その岸べでもがく。
 あげくのはては、政治の制度は、くたくたになり
 その運動が停止し、その機構が逆上の火をはなつのを感じる)

ここでは「国家」はブルジョア的に運転される機械として(末尾二行)、その末路が描かれている。更に続けて、自由主義、個人主義は、国家のみか倫理をも破壊するという——

As nature's ties decay,
 As duty, love, and honour fails to sway,
 Fictitious bonds, the bonds of wealth and law,
 Still gather strength, and force unwilling awe.

(*The Traveller*, ll. 349-352)

(自然のきずな衰え、
 つとめ、愛、名誉が力をうしなうにつれて、
 架空のきづな、富と法律のきずなが
 その力いやまし、無理やり畏怖をおしつける。)

ブルジョア個人主義が「社会的連帯のきずな」を切断し「自然のきずな」('nature's ties', 'bonds of nature')を衰退させ、それにかわり「虚構のきずな、富と法律によるきずな」が次第に人間関係の支配力をましていくという認識はまことに確実といってよい。農村を基盤としあるいは原型とする共同体的な人間関係が富と法律を武器とする「虚構の」人間関係にとってかわられつつある状況の認識である。そしてその打開策として君主主義がもちだされ、「思索す

るものが労働するものを支配し²⁰⁾」その各々が自身の役目を遂行するという有機体的国家観が主張されている。(傍白——名目的にせよ、少くとも「民主主義」社会を経験している僕らが、ここでゴールドスミスの反動性を糾弾するのは容易である。それはまた必要なことでもある。かの農村共同体が、君主主義の、あるいは専制主義の強固な基礎であることを、そして「共同体」の主張がともすれば、この方向に直線的に進む傾向をもつことを認識するためにも。歴史的事実としても彼ののぞんだ君主主義は二度と実現されなかったし実現されるべきものでもなかった。しかし彼の状況認識は鋭くブルジョア社会のアキレスの踵を突いたのではないか。誤解をおそれず誇張していえば、「虚構のきずな」を断って「自然のきずな」(「自然」の内容は異ってくるが)を求める必死の努力が、以後文学者の唯一のテーマとなっているとさえいいたい。)

以上彼の国家と農村共同体との密接な関係について述べた。次に共同体の人間像、共同体の人間関係について検討しよう。

この詩の中で最も大きくとりあげられている個人は村の牧師である。牧師が農村の生活で指導的役割をはたすことは言うまでもない。しかもその仕事が人間の精神のみか生活上の諸問題にまでわたっていた時代には、村の中心としての彼の村人たちとの関係にはいっそう注意しなければならない。

彼はすべての村人から愛され、又村人たちを、親鳥が雛を愛するように愛し²¹⁾、一切の私的欲望をもたずひたすら村人のために神の道を説く人物である。鳥とその雛鳥たちの比喻にもあきらかなように農村共同体の理想の精神的 patriarch ののだ、ウエイクフィールドの牧師がそうであったように²²⁾。

共同体の人間関係の最小単位は「家族」であり、その意味で牧師と村人との関係は家族的人間関係を比喻として使用されているが、次の農民の一家族が村を去る時の情景にはそれが理想的に描かれている——

The good old sire the first prepared to go
To new found worlds, and wept for others' woe;
But for himself, in conscious virtue brave,
He only wished for worlds beyond the grave.
His lovely daughter, lovelier in her tears,
The fond companion of his helpless years,
Silent went next, neglectful of her charms,
And left a lover's for a father's arms.

20) *The Traveller*, l. 372

21) '..... as a bird each fond endearment tries

To tempt its new-fledged offsprings to the skies. (ll.167-8)

22) 前出拙稿参照

With louder complaints the mother spoke her woes,
 And blest the cot where every pleasure rose,
 And kissed her thoughtless babes with many a tear,
 And clasped them close, in sorrow doubly dear,
 Whilst her fond husband strove to lend relief
 In all the silent manliness of grief.

(ll. 371-384)

(老いたる父が最初に新大陸に渡る決意をしたが、
 他の者の悲痛をおもうと涙を流した。

しかし、自分だけなら勇気をふるって、

あの世にいったってよいと思った。

彼のひとり娘、泣くといっそう美しい娘、

無力な晩年のやさしい友となるもの、

黙って彼のあとにつづいた。美しさをなげすめ、

父のために恋人の腕をはなれた

母は歎きの声をあげ

すべてのたのしみのあった家に幸あれと祈り

涙ながして、無邪気な子供らに切吻し、

悲しみがいとおしさをいやまし、彼らをだきしめた。

そのやさしい夫は、じっと悲しみをこらえながら

妻をなぐさめようと努めた。)

さきに引用した一節(『遊子』ll. 349-352)の中で「自然のきずな」が衰える
 と 'duty, love, and honour' という反マンデヴィル的美徳が力を失うといっ
 ているが、この家族は「自然のきずな」で固く結ばれ、諸美徳は生きている。
 しかし彼らはこの地を離れようとしているのだ。ボリス・フォードはこの「老
 いたる父」「うつくしい娘」「やさしい夫」は「きまり文句や単なる人形とい
 うよりはむしろ、失われた秩序の象徴」だといっている²³⁾が、叙上の意味でこ
 れは正しい指摘だと思う。

以上はオーバンの意義を主としてその公的な面から眺め、オーバンが貴族主
 義的価値をもつ共同体の性格を有することを指摘した。しがした個人の側面
 をもつことはいうまでもない。オーバンは「故郷」として設定されているので
 ある。したがって、それだけオーバンの喪失の悲哀は切実なものとなるわけ
 ある。

In all my wanderings round this world of care,
 In all my griefs—and GOD has given my share—

23) Boris Ford, 'Oliver Goldsmith', in *The Pelican Guide to English Literature*,
 Vol. 4, p. 385.

I still had hopes, my latest hours to crown,
Amidst these humble bowers to lay down.

(ll. 83-86)

(この憂き世をさすらう旅のうちに
人並になめた悲しみのうちに、
私にはいつも希望があった。晩年には、
これらのそまつな家に身をよこたえよう、と)

オーバンは、彼がそこで幼少年時代をすごし²⁴⁾、そこから「憂き世の放浪」に旅立立った故郷、そして老いの身を横たえる憩いの地なのである。これと全く同じ故郷観がすでに『世界市民』のなかでも語られている——

「幼い時代をすごした土地にはそれ以外のなにもものたのじませられないほど魅惑的なものがある。どんな有為転変の人生を経験しようと、仕事がいかに辛かろうと、どここの土地を放浪しようと、疲れのはてに思うのはいつも故郷の平穏なくらしてである。われわれは誕生の地でみまかることを切望する。この楽しい期待のなかに、どんな災難をも慰めてくれる麻酔剤を見出す²⁵⁾。

故郷によせた期待のなかには、老いの身を横たえる地としてのみか、あの村の牧師や教師のように、農民たちを周囲にあつめて、読書からの知識や放浪からの経験を語ってきかせたいという patriarchal な 'pride' が去来してもいた²⁶⁾。(傍白——ここから逆に考えると、主人公の理想的人間像は共同体の patriarch 的な牧師の像である。又少しずらせば共同体の政治的経済的 patriarch としての地主貴族である。少し角度を変えと、彼は、いわば不在地主であるといえなくもない。この詩には放浪中是不在地主であった主人公が、帰ってきて昔日の面影のない村の姿を見て悲しんでいるというおもむきがないでもない。彼が、失われゆく美德のひとつに 'contented toil' をあげるあたり充分に貴族的、地主的ではないか。ついでに言ってしまうと、エンクロージャーによる農民の悲惨な状況に注目し、あるいは共感したのは、彼の土地貴族的の心性がエンクロージャーのなかに、農民と共通の危険な運命を見たためだとも

24) Cf. l. 6 'Seats of my youth.....'

25) *Citizen of the World*, letter ciii

26) 'I still had hopes, for pride attends us still,
Amidst the swains to show my book-learned skill,
Around my fire an evening group to draw,
And tell of all I felt, and all I saw.

(ll. 89-92)

いえよう。ブルジョア経済の確立と共に「土地」は生産手段としては、第一義的な地位を「資本」に奪われてしまった。エンクロージャーはその最初のショッキングなあらわれである。したがって、僕らはこの詩のなかに悲惨な農民の姿そのものの真に共感的な形象化を探しても見つからないわけである。農民は決して生きた人間、精神の主体としてではなく、ただきわめて抽象的に、国家的な、貴族的モラルの反映として、‘bold peasantry’ 一般として描かれるにすぎない。しかも少しも bold ではない、時代の勢にただ押し流されていくにすぎないのは、抽象的にしか——生きた人間としてではなく——見られていなかった証拠である。とはいえあながちゴールドスミスのみを非難するのはあたらない。なぜなら、共同体社会の緊縛下にある限り、彼らを精神の主体たらしめる創造的エネルギーは剥奪されたままの状態にとどまっているから。したがって、いかに共同体の生活が牧歌的、平和的であろうと、それをぶちこわすことが、彼らの眠れる創造的エネルギーを解放するために必須であるといつてよい。「共同体」ばやりの今日、用心が肝腎な所以である。）

最後にオーバンは、Poetry のすまいとしての意味をもたされている。

…… Sweet Poetry, thou loveliest maid,
Still first to fly where sensual joys invade.

(II. 407-8)

(……うるわしい詩よ、汝、美しい乙女よ、
肉の快楽の侵入する土地からまっさきに逃げさる)

エンクロージャーは、農村を崩壊させて農民とその ‘rural virtues’ を追いだただけでなく「詩」をも追いだしたのだ。古典的伝統の「田園詩」はもはや荒れはてた村には棲むことができない。その棲み処、「田園」を去って遊離魂のように漂いはじめる。

ここから明瞭のように、オーバンは、彼の理想的社会であると同時に、伝統的な田園詩（たとえばヴァージルの『農事詩』）によって養われた感性の構想する理想的な詩的世界でもあるのだ。

この大文字の「詩」，「美しい乙女」はいわばオーバンの精髓，魂なのである。彼が最後に呼びかけ、誤れる人々に警告をしてくれと頼むのはこの「詩」にたいしてであり、それが外ならぬこの長詩『荒れはてた村』のはたす役割であり、その警告が一篇の趣旨なのである。

ついでにいうと、この詩は、遊離魂「乙女」への evocation で終るが、オ

ーバンを「乙女」と形象化したところがいくつかある²⁷⁾。それは、都市と農村の関係を論じた際にのべたが、田園が都市の汚濁に染みやすい白無垢の衣として想像され、それはただちに無垢なる乙女のイメージを喚起する。この際、都市は「肉の快楽」を求めて乙女を冒す悪魔と関連づけられるだろう。伝統的な、無垢な乙女と彼女を冒す悪魔というテーマが無意識裡にこの詩の下敷きになっていると見られる。*'bold peasantry'* が少しも *bold* でないのもひとつには、傷つきやすい乙女としてのオーバンという主導的なイメージに、心理的に光被され、あるいは浸透されてしまったためとみられる。

いずれにせよ、本来親しい「個人」の死を悼む「エレジー」がこの詩のばあいオーバンという「社会」に拡大されている²⁸⁾とはいえ、その底にはやはり、*rural virtues* の象徴としての「女」のイメージが潜んでいるのだ。

さて、農民は姿を消し「田園詩」も去ったあとの「自然」のなかに——農村共同体「社会」はもはやないから——古典的伝統に媒介されない自らの「無垢な心」²⁹⁾を孤独に曝して、別の種類の詩を探しにロマン派詩人がやってくるのもう間近かである。

6 方 法 (1) —— 対 比

前章まで『荒れはてた村』の思想的な側面を検討し、過去のオーバンは彼の理想的社会（その「貴族的」価値の実現された）であり、理想的な詩的世界であったことを見た。

次にこの詩の特徴的な方法について考察することにした。

その第一は「対比」である。

Sweet Auburn! で始まる第一節 (ll. 1-34) の牧歌的な過去と、第二節 (ll. 35-50) の悲惨な現在との対比。この過去と現去との対比とその反復がこの詩の著しい方法的特徴である。

対比が方法的な効果をもつのは叙述の強化、鮮明化にあることはいうまでもない。ここでは二枚の風景画——過去の牧歌的黄金時代の風景と現在の荒れはてた風景——とが直接的に対比されている。まずこうした二枚の客観的な描写を与えておいて、その原因を指摘し危険を警告する（第三節 ll. 51-74）とい

27) たとえば *Sweet Auburn!* という呼びかけ自体がそうであるが、第五章冒頭で引用した、都会に憧れて男に捨てられた田舎娘のイメージ (ll. 326-336), 又間接的にオーバンの比喩ともみられる ll. 287-294.

28) Cf. E. Minor, *op. cit.* 彼は、この点をこの詩の文学史的意義として強調している。

29) 本論第七章参照。

う順序である。彼の意図は、風景描写、自然描写にあるのではなく、思想的に、二つの異常な対比の由来を指摘することにある。この詩のもつ思想的、警告的な意図が必然的にとる説得術といってよい。彼には人に警告すべき明確な、固定した思想がすでにあって、それをいかに効果的に伝達するかが問題なのだ。だから対比の両項がそれぞれ誇張され、理想化され、絶対化されることは当然で、それだけ効果的になると彼は考えている。

そして彼の思想の分析のなかで見たように、その基本的対立は、ますます盛んになってゆくブルジョア的価値体系と衰退してゆく貴族的（農村共同体的）価値体系との対立であるから、前者が現在の項に、後者が過去の項におかれるのもきわめて自然である。

対比の最もショッキングな例は——

The country blooms — garden and grave. (l. 320)

この一行の中に強引に連結された対立物である。

この過去—現在、あるいは貴族的—ブルジョア的の対比のパタンは反復される。たとえば第四節から第五節まで (ll. 57-74) は、過去 (ll. 57-62)、現在 (ll. 63-68)、過去 (ll. 69-72)、現在 (ll. 73-74) というふうに反復されている。

この詩の第一部とみられる部分 (ll. 1-74) は、更に過去の描写 (ll. 1-34)、現在の描写 (ll. 35-50)、そして一般的叙述の結論部 (ll. 35-50) に三分して考えられるが、ここにも、前二者の描写の手法にたいする結論部の瞑想的叙述³⁰⁾、前者の具体的にたいし後者の一般的、という対比がある。そしてこの結論部こそ彼の主張したいところなのだ。すなわち——

Ill fares the land, to hastening ills a prey,
Where wealth accumulates, and men decay.

しかもこれらの三部分はそれぞれ、黄金時代のオーバンの喪失、不在を嘆く悲哀の声で結ばれ、これが全詩の底を流れるライトモチーフとなる。

30) Cf. T. S. Eliot, *op. cit. loc. cit.* 'If you examine it [*i. e.* *The Deserted Village*] paragraph by paragraph, you will find a shift just at the right moment, from the descriptive to the meditative, to the meditative again, to the landscape with figures, to the delineation of individuals (the clergyman and the schoolmaster) with a skill and concision seldom equalled since Chaucer.'

These were thy charms — but all these charms are fled.

(第一の結尾)

Far, far away thy children leave the land. (第二の結尾)

These, far departing, seek a kinder shore,

And rural mirth and manners are no more. (第三の結尾)

さて、こうした対比がたんに二つの風景画の静的な対置にすぎない、つまり両者があくまでそれぞれ別個の相貌をもって静止しており、対立し、対立の発展にならないのはなぜであろうか。これに精確に答えることはかなり困難である。

おそらく根本的には、ゴールドスミスの思惟形式のなかに「歴史の運動」という観念は存在しなかったことによるのであろう。歴史的意識はドクタ・ジョンソンもそうだがゴールドスミスにもないのである。「現実」は歴史的現実ではなく自然の法という普遍性の仮象として、それに光被されている。極言すれば「現実」は常に普遍的な思想を表現する媒体にすぎない。彼には常に不変の思想がすべての前にあるのだ。前述したように、それ故、エンクロージャーの農村にたいする破壊的作用が彼の意識にのぼるのもこの思想のカテゴリー内であって、現実そのものから観察帰納されたのではない。

「村」の変貌過程を見ていない。彼は帰郷者として登場する。彼の不在中の村の生起は問題ではない、必要なのは幼少年時代の記憶の中にある幻想の過去と、目下目にしている現状だけだ。

そしてこの両者は、互に相反する価値——いや正確にいえば、互に他の裏返しであるにすぎない。それは讀うべき良き過去の事象に‘no’あるいは‘no more’を、あるいは‘……are fled’をつければ、そのまま現在の事実になるといったものである。

こうした本来の歴史的意識の欠除（アクチュアリティの無視と普遍的観念の優位性にいたる）のほかに、保守主義者の彼にとっての不可避の敗北主義（それが文学形式としては必然的にエレジーの形式を採用させる）があって、それが両者の対立発展という動的な展開を示さなかった（全 430 行、同一の思想の反復、変奏でしかない）理由になっているようである。

オーバンは没落の一途をたどるしかないというこの認識は、前述したようにオーバンを、純粹無垢な（したがって傷つき、汚れやすい）乙女として構想しているあたりにも見られる。乙女（田園的美徳）の肌は都市的汚濁に染みやすいから、それを拒否するにはそれと対立抗争することではなく、それから逃亡するしかないという敗北主義。

農村へブルジョア的なものが侵入し、農村を腐蝕してゆく社会情勢を政治家

が認識するように訴える——

Ye friends to truth, ye statesmen who survey

The rich man's joys increase, the poor's decay. (ll.265-6)

しかし最後に訴えるのは sweet Poetry にたいしてであってみれば、こうした現実のたいして彼がほとんど絶望していたことは明白であらう。

こうして彼の敗北主義は、オーバン村を全く異なる二枚の絵——無垢の乙女に象徴される fairy land (この詩冒頭の祭の日の村人たちのにぎわいは、お伽の国の小びとたちに似てはいまいか——無知の幸福!)と、そこに侵入して乙女を冒そうとし、彼らが逃げ去ったあとに住みついた悪魔 ('tyrant'³¹)の住居としての荒地——この仙境と荒地のイメージを喚起し、それぞれを理想化し絶対化する結果を生んだのである。

しかし、現実面における敗北主義はそのまま自己の思想の敗北の容認ではない。それどころか、現実を超えてその上に光被する自分の思想の普遍妥当性は絶対に信じている。そしてその思想が托される「詩」の力を信じている、少くともその住み処(肉体)を追われて遊離した「詩」(靈魂)が遍在して、「現実」の悪を指摘警告しうる力を信じようとしている。

だからこそ、この詩がエレジーであるにもかかわらず、過度に感情的にも瘡癩的にもならず、落ちつきあり均整のとれた文体で首尾一貫しえたのである。

以上、方法としての「対比」は、この詩の意図する思想の伝達のために効果的な手段であること、及び「対比」が対立発展にいたらない理由に関して、方法と思想との関連の面から補足的に述べてみた。

次に、もうひとつの方法的特徴である「一般化-個別化」関係について検討しよう。

7 方法(2)——一般化と個別化

Sweet Auburn! loveliest village of the plain;
Where health and plenty cheered the labouring swain,
Where smiling spring its earliest visit paid,
And parting summer's lingering blooms delayed:
Dear lovely bowers of innocence and ease,

31) Cf. 'Amidst thy bowers the tyrant's hand is seen,
And desolation saddens all thy green.' (ll. 36-7)

Seats of my youth, when every sport could please,
 How often have I loitered o'er thy green,
 Where humble happiness endeared each scene,
 How often have I paused on every charm,
 The sheltered cot, the cultivated farm,
 The never-failing brook, the busy mill,
 The decent church that topt the neighbouring hill,
 The hawthorn bush, with seats beneath the shade,
 For talkative age and whispering lovers made !

(ll. 1-14)

(美しいオーバン！一番美しい平野の村
 健康と豊饒が、農夫を喜ばせ、
 ほゝえむ春はまっさきに訪れ、
 去りゆく夏の花はいつまでも去ろうとしなかった。
 無垢と怡楽のたのしい住み家
 私の幼い頃の故郷、どんなあそびもたのしかった時の。
 いくたび、おまえの草地を歩いたことか
 つまましい幸福が、ひとつひとつの情景をしたしいものとした。
 いくたびその美しさを眺めて歩いたことか。
 樹蔭の家、耕やされた畑、
 水の絶えることのない小川、忙がしい水車、
 あたりの丘の上のきちんとした教会堂、
 さんざしの茂み、年寄が話し
 恋人たちがささやきかわす、その蔭の腰掛け。)

本論冒頭でのべた、この詩のもつある よそよそしさ、平板さは、この詩の表現の一般性、抽象性のためであり、又たとい *precise, particular* であっても *concrete* ではない点に由来するといえよう。

しかし、これはひとりゴールドスミスのみの特徴ではなく、十八世紀の詩全体についていわれることは既に常識である³²⁾。

上記の引用で、彼がしばしば思いかえした *charms* を列挙する——‘*sheltered cot*’, ‘*cultivated farm*’, ‘*never-failing brook*’, ‘*busy mill*’, ‘*decent church*’

32) こうした傾向は Dr Johnson の次の言葉のなかにはっきり表明されている。

“The business of a poet……is to examine, not the individual, but species; to remark general properties and large appearances……. He is to exhibit in his portraits of nature such prominent and striking features…… and must neglect the minuter discriminations……” (*The History of Rasselas*, ch. x).

これは十八世紀の古典主義文学論の見本としてしばしば引用される。

更に 'talkative age', 'whispering lovers'……。各修飾語はそれぞれの名詞を限定しているけれど、決してそれらを個性化、具体化する機能をもっていない。極めて precise ではあるが平凡な attributes でしかない。

これらは charms の具体例として個別化されたものであるけれど決して具体的、個性的な印象を与えないのである。この点についてボリス・フォードも、これらの形容詞は exact であるとはいえ、いまだ知覚されていないものを正確に表現したというよりも、既知のものの正確さである、と語っている³³⁾。

すなわち、既知の観念、既成の表現であって、新しい独創的な世界の発見がここには見られない、というわけである。

これはこの詩に登場する「私」の性格にかかわる問題である。あるいは「私」の代表する十八世紀詩人一般の「外界」（「自然」を含む）にたいする精神的態度の問題である。（傍白——これはヨーロッパの、いや人類の精神史、思想史を正面に据えて取り組むべき至難なわざであることはまちがいない。とてもその能力はないことを認めた上で、やはり、僕にとって最大にして唯一の関心はここにしかないことを痛感する。おおげさにいえば、人間の思惟方法のパターンの変遷を歴史の中でとらえることだ。Auerbach は *Mimesis* の中で「西洋文学にあらわれた現実の再現」をホーマーと旧約聖書から現代のヴァージニア・ウルフまで辿っているが、実に示唆にとむ研究である。ここでは僕の貧弱な知識と感性をせいっぱい働かして一応のことを言ってみるだけである。）

この虚構的な「私」はいかなる性格を附与されているか。彼は故郷に帰って来て、昔の面影のない村を見て感慨をもよおす。彼は記憶と現在の間を往復する³⁴⁾。しかし「私」は荒れはてた村の前立っているときでも又記憶の中でも、つねに外界と「私」との間には見るものと見られるものとの間の一定の距離がある。例の「樹陰の小屋」も「耕やされた畑」も「水絶えぬ小川」も「忙しい水車」も……すべて、いわば永遠の相下にある——ジョンソンの言葉を借りれば「一般的特徴と大体の外観」を具えているにすぎない。

「私」の情緒から独立した世界。僕らの常識では、幼少年時代をすごした世界が記憶の中へと逆流するとき、その世界は情緒的に個性化されるはずである。しかしここには「私」の過去がひとつひとつの事物に附着して個性的に染

33) Boris Ford, *op. cit.*, pp. 382-3

34) Cf. 'How often have I loitered o'er thy green. (l. 7)

How often have I paused on every charm. (l. 9)

How often have I blest the coming day. (l. 15)

Here as I take my solitary round…… (l. 77)

There, as I past with careless steps and slow …… (l. 115)

めあげられず、見る「私」と、見られる「外界」は截然と分かれているのである。実に透明であり、濃淡と密度を欠いた、平明な——散文的に論理的な——世界がここにはある。

それはこの「私」が、荒れはてた故郷を前にした帰郷者の「感受性」であるよりも——帰郷者としての「私」はあくまで虚構なることは『ウエイクフィールドの牧師』や『世界市民』の「私」とおなじである——ひとりの客観性を附与された観察者、「思想」の現実における視点といった性格を色濃くつけているところにある。

たとえば村の牧師——「私」の記憶のなかの代表的個人であり、55行(11. 137-191)を費して描写されている——の叙述を検討してみれば直ちに了解されるように、彼は「私」の記憶の中で少しも個性化されていない、彼は特定の個人であるよりもむしろ理想的牧師の一般像——ジョンソンの言葉でいえば「個ではなく種」——である。彼はパーソナリティではなくして「理念」である。描写が一般的なのではない。たとえば子供らが彼のガウンを引っ張って彼を笑わせようとするはなはだ個別的な描写がある³⁵⁾。しかしここでもそれは「彼の微笑は父親の慈愛をあらわし」ており、牧師一般の「理念」の説明としての役割を担わされている。彼はまると公的な存在であって個人的感情を所有しないかのようである。

思想ないし理念が現実を光被し、現実を従属せしめ、現実を規定する。思想が常に現実優先し、現実のなかに思想の契機を発見し思想を構築するのではない。だから、現実を生きた総体としてではなく、その一般性においてとらえ、「こまかな差別」は切りすてられてしまう。

各々の種には「自然法」にしたがって演ずべき役割があり、それらの構成する全体は秩序をなすという当時の支配的な固定観念、確信が、このように詩の方法まで規制した。現実を、詩人の無垢な感受性を通して眺める、すなわち現実を、詩人のパーソナリティの核にむかって収斂せしめる、といった詩的世界の構成法は採用されるにいたらず、静的な抽象的な思想の秩序が現実の上^上にあってこれを照明している。

もうひとつ例をあげよう。第六章で言及した、あの農民の一家族が離村してアメリカへと旅立ってゆく場面である。

..... the poor exiles

Hung round the bowers, and fondly looked their last,
And a took a long farewell, and wished in vain
For seats like these beyond the western main,

And shuddering still to face the distant deep,
Returned and wept, and still returned to weep.

(11. 365-370)

(……あわれな亡命者たちは……)

家のまわりを離れず、胸ふたぎこれを限りにもう一度眺めて、
長い別れの挨拶をした。そして空しくも、
西の海の彼方に、これと似た家をもちたいとねがった。
しかし、はるかな海原を眺めておきのき、
また家にたちかえっては泣き、戻っては泣いた。)

このあとに第六章でのべた「失われゆく秩序の象徴」たる家族各人の描写が続くが、この情景は、そういう状況下においては誰でもそう振舞うにちがいないように振舞う。予想通りのことがおこるのである。

この情景を見つめる「私」の個性-感受性を通して把握された、したがって個性的な情景ではこれはない。作者はいわば「自然の法」を主宰する神のように上から、「法」の逸脱がないように外から見ている。それに続く家族の各人の行動も、「自然の法」(理想的な家族的秩序と倫理)そのものの具体的表現にはかならない。

具体化とはいえそれは外在的な「理念」のイラストレイションであって、外的世界の諸事象に内在する意義を発見する——つまり個性的な意義を附与することでないのはいうまでもない。

しかしいままで僕がゴールドスミスの詩に欠除するものとして述べてきた抽象的一般的傾向は、ひとつにはそれが「自然」そのものをではなく、「人間」あるいは人間関係たる「社会」を主題にしている³⁶⁾ことにも由るのである。

ジョフリ・ティロットソンは十九世紀と比較しつつ「十八世紀の詩法」³⁷⁾を論じて、十八世紀詩の傑作は人間と人間、十九世紀のそれは人間と自然(ひとときわずぬけた才能をもつ個人と外的自然)の詩であるという。十八世紀の詩人は、外的現実を経験する際には、十九世紀の詩人とはことなり、外界にたいして‘white mind’をさしだすことはあまりない。「十八世紀の自然詩と十九世紀のそれとの相違は大部分、新鮮な反応と書かれる詩の間の媒介的段階の存在の有無によって説明される。」³⁸⁾という。つまり、ある外界を経験するば

36) 本論第五章p. 38参照

37) Geoffrey Tillotson, 'Eighteenth-Century Poetic Diction' in *Eighteenth Century English Literature*, ed. by James L. Clifford (New York: Oxford Univ. Press, 1959.)

38) *Ibid.*, p. 218, 'It is this presence of a stage intermediary between the fresh response and the written poem that account for much of the difference between an eighteenth century nature-poem and a nineteenth century one.'

あい、十八世紀詩はいままでのすべての経験、人間の経験、書物の経験等で着色されている mind をもってするという。(この媒介の中には古典の伝統や、当代の思想が含まれることはいうまでもなからう。)

これは極めて示唆的な指摘である。

このようなわけで、僕らがこの詩の中に十九世紀の詩の常識を素朴にもちこむと二重に誤ることになる。第一にこの主題は、十八世紀の詩人の不得意な「自然」ではなく「人間」ないし「社会」なのだから、第二に、この中に未分化のまま含まれている「自然」は、詩人の 'white mind' による個性的な体験ではなく、彼のあらゆる種類の経験を通じて一般化された「自然」でしかないのだから。

しかし、叙述が、単に一般的、抽象的なのではないことは注目しなければならない。一般から個別へ、個別から一般へと推移する方法はこの詩全体の構成と展開を規定する方法である。(ここでは「具体」という言葉をさけて「個別」と呼ぶことにする。)

これは、長詩という形式がその平板さを救うために必然的に要求する方法といつてよいが³⁹⁾、人間論、社会論を展開するばあいには極めて有効な、説得のための方法、一種の雄弁術とみられなくもない。(前章では「対比」の方法が、詩の思想的、教訓的意図の手段としての面をもつことを指摘した。)

詩全体は三部にわけてみることができるが、第一部 (ll. 1-74) は過去及び現在の描写のなかで眺めたオーバンの一般的叙述であり、第二部 (ll. 75-250) は「私」の記憶に即してみた個別的な叙述である(村にきこえるさまざまな物音 (ll. 113-124), 村の牧師 (ll. 137-192), 村の教師 (ll. 193-216), 村の居酒屋 (ll. 217-250))。第一部で一般的に哀悼されたオーバンは、第二部では「私」の個人的な感慨として個別化されることによって、その喪失感は強化される。そして第三部 (ll. 251-430) は、オーバンへの個人的な愛惜を国家的な次元にまで拡大、一般化する。すなわち、エンクロージョーによる農村(オーバン)の depopulation は決して一農村、農民階級のみの問題にとどまらず、一般に国家全体の問題に関係づけられていくのである。

詩全体の構成を規定したこの方法は、その細部にまで及ぶ。たとえば冒頭の一節を見よう。

オーバンをまず呼びだし、それを「一番美しい村」と規定し、次にそれを個別化して説明する。季節の恵み、田園の美德。それから「その美しさをいくたびおもいかえたことか」といい、「美しさ」を列挙する。樹陰の家、畑、小川、水車……というふうに。(この個々の事物が個性的情緒に滲透されて具体

39) p. 46の脚註を参照

化されてはいないことは既に述べた。それらに附着した個人的な経験をいとおしむのではなく、「美しさ」の実例として説明のためにある。）

オーバンの現状を述べる第二節においても事情はかわらない。

Amidst thy bowers the tyrant's hand is seen,
And desolation saddens all thy green. (ll. 37-38)

という一般的叙述があつて、次にその実例——うちすてられた耕地、空を映さぬ小川、うつろな声でなく鳥、崩れた塀と丈高くしげる雑草——が列挙される。

「暴君の手」は具体物であり、メタファーであるから、これを「一般的」叙述とよぶことは一見適当でないようにみえる。しかし、「暴君の手が見える」といわれても、それがどんな手か、いつこうに鮮明に見えてこない。「暴君」はそのまま、「富」、「贅沢」と置き換えてもほとんど詩的価値は減じないだろう。すなわち、それは十分に象徴化された事物ではなく、依然抽象的次元にとどまっているわけであるからやはり一般的叙述というべく、また一般的叙述だからこそ不可避免的に次に具体例をもってこれを補足説明する必要があるのだ。（全詩を通じてほとんど象徴的表現の域に達しているといえるのは、僕の考えでは 'The country blooms — garden and grave.' の一行だが、これとても、それぞれ対立的価値を代表するものであってみれば、十分な象徴性をもつとはいえない。）

次の部分 (ll. 51-74) までは叙上の、過去、現在のオーバンの描写の上にたつて、その含む思想が結論的に、一般的に語られる。その中で 'bold peasantry' の説明として、過去及び現在の農民階級の姿 (ll. 57-74) が詳述される。

以上で第一部は終るが、このような一般化-個別化の反復と交錯は全詩を通じて見られる方法的特徴であり、その推移展開の技術の巧みさは「完全に見事」であるとエリオットは評している。⁴⁰⁾

しかし、一般から個別へ、個別から一般へのひんばんな往復運動にもかかわらず、前述したように読者のパーソナリティの総体、その深部を揺るがすにはいたらず、感性よりはむしろ理性にはたらきかける説得の域を出なかったことは、すでに見てきたように、この詩が自然詩ではなく思想詩であるところに——また自然詩は彼の時点ではそもそも成立しえなかったところに——あると見られるのである。

40) Cf. T. S. Eliot, *op. cit.* p. 181

む す び

以上『荒れはてた村』の思想を分析して、エンクロージャーを頂点とする第二次農業革命に触発されてその中に、彼の保守的、貴族的世界観がいかに表現されているか、又、その詩的方法を分析して、その中に思想がいかに反映しているか、思想の方法と詩的表現の方法との間の相関関係を見てきた。

巨視的、歴史的に見れば、ゴールドスミスは、不充分とはいえ（なぜなら主として思想の面においてであるから）、確実にあの農業時代の終焉と商工業時代の到来という文明史的転回期を体験しつづけたのである。とはいえ、この文明史的段階の発展が、ただその思想的な面においてでなく、「人間」の精神のありかたそのものにいかに深刻な意味をもつものとなるかは、たとい予感してきたにせよ、感覚しえなかった。（たとえば、都市産業社会では、「共同体」的人間関係のみか、季節のサイクルそのものが消滅する。そこでは人間生活のリズムは理論的には存在しなくなる。この生活のリズムが生産活動のリズムに乗らないとき、あるいは生産活動にリズムそのものがないとき、それが人間精神の活動に深刻な悪影響を与えることはほとんど必然ではないか。二十世紀の優れた詩人たちが必死に回復しようとしたのも、この季節のサイクルにひそむ死-復活のテーマではないのか。産業社会にいる僕らは、もはや自然的ではなく、虚構的に、死-復活のリズムをみずからつくりだすことを、また実在ではなく虚構としての「共同体」に参加することを、迫られているのだ。）

ともあれ『荒れはてた村』の世界は、十八世紀の幸福な思想——人間界も自然界もともに貫いて整然たる秩序を構成する「自然法」の思想が、その秩序解体の危機において辛くも把えた統一的世界像であった。

それは去りゆく農業時代への挽歌であり、来るべき商工業時代への警鐘であった。この文明史の危機的転回に、彼は、その保守的思想をもって対決し、また保守的=反時代的であったからこそこれを危機と見抜き、その危機の本質を鋭く剔出して、それをひとつの世界像として提示しえたのである。

その意味で、その限界（不可避的な）にもかかわらず、この詩の思想を「独創的、予言的」⁴¹⁾と呼んでも決して過大評価とはいえないであろう。

富が蓄積され、人間が衰退してゆく土地
そこは禍いの地、急速に不幸の餌食となる

(II. 51-52)

(1961. 10. 31)

41) T. S. Eliot, *ibid.*, loc. cit.